

くじら日記

太地町立博物館から



あるトレーナーが黙々と何かを作りました。

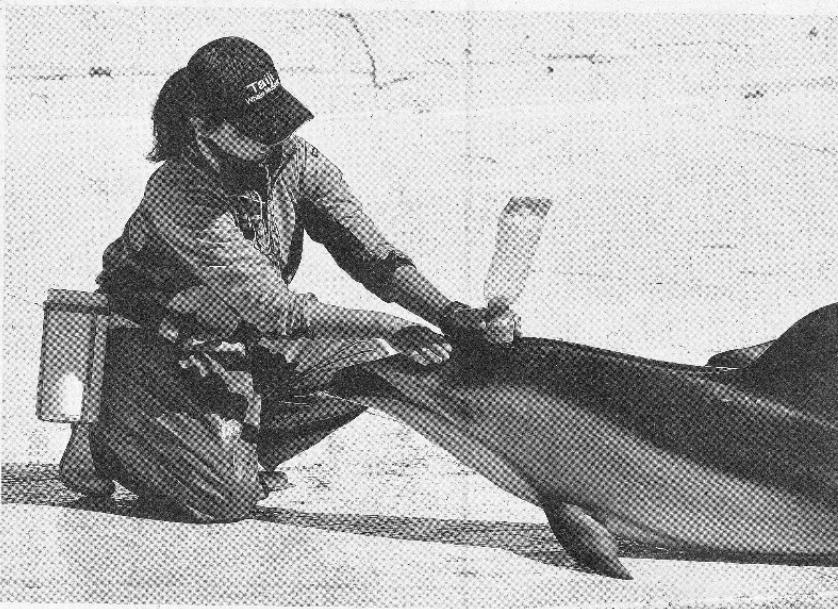
ペットボトルをほさみで切って上下に穴を開いた筒状にし、その片方の穴に細長いポリ袋をかぶせるようにして取り付けました。

トレーナーがそれを持って向かったのはイルカショープールです。ステージに上がったカマイルカの頭にのせました。呼吸を促すと、ビニール部分が勢いよく膨らみます。

鯨類は哺乳類であるため、頭の上有する鼻孔を使い肺呼吸をするのです。鼻孔は水中生活への適応に伴い、頭頂部に移動しており、そこから空気をまず吐き出し、続いて空気を吸い込みます。ショーンでそうした生態を分かりやすく解説するための小道具を作つてみました。

くじらの博物館には2種類のショーンがあります。イルカの形態的な特徴と運動能力を紹介する「イルカショーン」と、熊野灘に来遊するクジラ

「ショーン」の意義



自家製の小道具を使い、カマイルカの鼻孔の位置などについて紹介するトレーナー=太地町立くじらの博物館

飼育下の暮らし豊かに

の仲間を紹介する「クジラショーン」です。

それぞれの鯨類が起こす行動から、観客は、見て聞くこと、つまり視覚、聴覚をもつて鯨類の身体能力と学習能力

を知ることができます。トレーナーの解説からは、生態などをについて学ぶこともできます。

そこで、ショーンの臨場感ある演出は、誰もが親しみを感じます。

（太地町立くじらの博物館館長 稲森大樹）

原則、第1日曜日に掲載します。

じ、鯨類への興味や関心を呼び起します。教育的でレクリエーション機能を持つショーンは、くじらの博物館に欠かすことのできない展示手法です。

動物にとっても、ショーンは重要な役割があります。行動の対価として、餌を食べられるからです。しかし、それは食欲を満たすだけの機会ではありません。

野生の鯨類はさまざまな方法で餌を食べることが報告されています。

ザトウクジラは、魚の群れの周囲を螺旋状に旋回しながら気泡を吐き出します。気泡は円柱状の壁をつくり、魚の群れの動きを封じます。そしてクジラは大きな口を開けて、それを丸飲みするのです。

バンドウイルカは、仲間と共に音でコミュニケーションをとりながら魚の群れを囲います。周りをぐるぐると泳ぎ、巧みに一箇所に集め、一気に捕食します。野生の鯨類にと

つて、餌を食べることは、緻密な戦略と激しい運動を伴う生存をかけた活動でもあるのです。

環境は異なりますが、飼育

下の鯨類にとっても、予測不可能な展開と多様な刺激で構成されるショーンは、適度な緊張感と興奮を与えられ、想像力を働かせることができます。

さらには身体能力向上の機会でもあります。つまり、ショーンは飼育環境での動物の暮らしを豊かにするエンリッチメント（動物のための環境整備）としても機能しているのです。

残念ながら、冒頭で紹介した小道具は、期待通りに膨らまないこともあります。作り直すことになりました。どのようにしたらイルカの生態や魅力を伝えることができるのか、悩みながら取り組むトレーナーの姿を見て、ショーンはトレーナー自身の知識、技術、感性をも磨いているのだと改めて気付かされました。

（太地町立くじらの博物館館長 稲森大樹）